



中部はその名の通り沖縄本島の中心部に位置し、5市5町3村からなる街と農村の混在した地域。東シナ海に面した県都那覇市国道58号線を北上すると隣町の浦添市から中部地区に入り、車で40分も来れば紅いもの産地、読谷村に着く。一方、国道329号線を北上し、太平洋側に抜けると西原町に入り、車窓からはさとうきび畑が見渡せ、グリーンツーリズムの始まりとなる。西原町小那覇集落からは太平洋に浮かぶ久高島、津堅島と共に勝連半島が見渡せ、心をなごませてくれる。那覇から1時間余りで勝連半島に着くが、半島の付け根には2000年12月に世界遺産に登録された勝連城跡が確認できる。城跡の御庭(ウナー)に立つと5島と橋が心を和ませてくれる。

【勝連町ワイトイ】

昭和7年7月より工事が始まり、昭和10年3月に完成したワイトイ。今や、勝連町の名物となっている。石切や斧、つるはしなどを使い、人の力だけで切り開かれた。高さ15.8m道幅5.8メートル、長さ169mその堂々とした断崖を見上げると、先人たちの知恵と歴史を感じることができる。(勝連町平安名)

【読谷村残波岬】

読谷村残波岬からは東シナ海が一望できる。(読谷村)



【湧き水の田芋畑】

宜野湾市大山の田芋畑。湧き水が豊富な田圃。(宜野湾市大山)



憩える農村と自然



【サトウキビ畑は銀のジュウタン】

銀のジュウタンを敷きつめたようなサトウキビの畑。11月からの開花とともに、ミーニシ(北風)が吹きはじめ、南国の島にも秋の気配が漂う。ススキに似たサトウキビの穂、沖縄の秋の風物詩。(具志川市高江洲)

【トビイチャーの日光浴】

トビイチャー(トビイカ)の日光浴は漁村ならではの風景。陽ざしに輝くトビイチャーに心洗われるひととき。(与那城町池味漁港)

むらを歩く

スコーンと突き抜けたようなカーツと照りつける太陽肌。ジリジリ灼けていくような感じがした。あの夏の日のことをまだ覚えていた。海が暮れるまで泳いだ。そんな遠い昔を思い出す場所が見つかる。いろいろと忙しい毎日だけど、今年思いきって「忘れていた日々」を見つけた。来ないむら。誰か歩いてくると、自分の思い出すところではない。そこが他のむらでも、自分のむらと重なり、心もなごませられる。ほら、その曲がり角を歩いていく。姿は幼い日のあなた。先を急がず、道草

【シーサー】

対戦をくぐり抜けた戦前からの赤瓦屋。その赤瓦の屋根には守り神のシーサー。がどしりと構える。(与那城町宮城島)



中部には街から近い田舎がある。太陽の角度によって何度も変化する海の色。与勝半島地先には、平安座島、浜比嘉島、宮城島、伊計島が浮かび海中道路として親しまれている。ドライブの最終地点は伊計島、珊瑚礁の岬、赤瓦の屋根、シーサー、ビーチと安らぎの空間がある。キヤットト愛ランド津堅島へは20分の船旅、今年の夏は中部に行こう。

東海岸の名所海中道路

与勝半島は具志川市から太平洋に突き出ている。さらにその先端には鳥々が海面に浮かんで見える。津堅島を除く六つの島々はすべて橋でつながり、格好のドライブコース。屋敷名と平安座島を結ぶ海中道路の南岸は5キロ四方にも及ぶ大アルタ地帯で潮干狩りにつづける場所。夏には海水浴もでき持ち込みのバーベキューも可能。夜はいざり火を焚いての漁も楽しめる。本島側の屋敷名から平安座島に伸びる4.75kmの海中道路は海のまっただ中を走る。海は浅瀬で絶好の海水浴場、遊泳客や、四半を問わずウインドサーファー達が集まり、かなりの賑やかさを見せる。海中道路ができる以前は宮城島まで干潮時の浅瀬上を人員輸送の幌張トラックが運行していたとのこと。今では、片側二車線の道路として整備されている。

【与那城町 海の周辺】



宮城島上原集落からは、ブルーの海色と伊計島が見渡せる。(与那城町宮城島)

【伊計大橋】



1982年に完成した宮城島と伊計島を結ぶ全長198mの赤いアーチ型の美しい橋。豊かな島の緑や微妙に変化する海の色や青い空とのコントラストが見事。橋からはエメラルドグリーンにきらめく透明感あふれる海を見ることが出来る。(宮城島・伊計島)

海岸のある村



海中道路の左右には干潟が広がる。